

板絵画家としてのシモン・ベニング
——再発見された《聖母子と二天使》——

杉山 美耶子（日本学術振興会特別研究員 PD／青山学院大学）

15・16世紀前半のブリュージュにおいて、画家組合は板絵画家と装飾写本画家たちとの競合を避けるため、後者に対し油彩の使用と独立したミニアチュールの制作を禁じていた。この規約を踏まえるならば、両者は互いに影響を与えつつも、実際の制作においては一定の距離を保っていたように思われる。しかし、多くの視覚資料から初期ネーデルラント美術を代表する板絵画家達の一部が、装飾写本の制作にも携わっていたことが判明している。特に1500年から1520年代にかけては、この姉妹芸術の間で一定の図像の「型」が流行した。そのなかでもブリュージュ＝ヘント派の装飾写本画家たちに大きな影響を与えたのが、ヘラルト・ダフィット（1455年頃—1523年）である。1500年前後に制作された装飾写本の多くがダフィットからの顕著な影響を示すだけでなく、彼自身も装飾写本画家達と共作し、複数のミニアチュールを手がけたと考えられている。ダフィットから多大な影響を受けた装飾写本画家の一人が、シモン・ベニング（1483/84年—1561年）である。同画家が制作したミニアチュールは特に1520年代においてダフィット作品の影響を顕著に示しているが、彼が板絵も制作していた可能性は近年まで等閑視されてきた。ベニングはただ一度、16世紀半ばにフランドルの歴史家D.ハルディンによって「装飾写本画家にして板絵画家」と言及されているが、一点の板絵もベニングに帰属されることはなかった。しかし2002年、M.アインスワースによって、ダフィット作品と顕著な類似を示すメトロポリタン美術館及びプラド美術館所蔵の二点の《聖母子》（共に油彩・板、1520年頃）が初めてベニングに帰属された。

本発表では、ベニングに帰属し得る新たな板絵作品として、《聖母子と二天使》（油彩・板、1500—10年頃、ケルン、応用工芸美術館）を提示する。本作品において、聖母は林檎を持つ幼子イエスを抱き、背後には受難具を持った二天使が飛翔している。聖母子の姿勢はネーデルラントで流行した「カンブレの聖母」を基盤とするが、聖母の上半身が三日月に縁取られていることから「太陽の聖母」も想起させる。本作品と顕著な類似性を示す作品が、ベニングによる《聖母子》（テンペラ・羊皮紙、ヘント、古典美術館）である。ヘント作品の図像を踏襲する一方で、異なる技法・媒体で描かれたケルン作品は、ベニングが板絵と装飾写本の双方を制作したという先行研究の仮説を補強するものである。更に本作品の図像的源泉と制作年代を考察するうえで鍵となるのが、ヘラルト・ダフィットに帰属されている『ロスチャイルドの祈祷書』（1505—10年頃）内のミニアチュールである。同時祈祷書はベニングがダフィットと共作した最初期の作例の一点と考えられており、以上の様式的・図像的比較に基づくならば、ケルン作品はベニングがダフィットと接触し、板絵制作へと関心を寄せ始めた最初期の作品と位置付けられよう。